

## 原著論文

## 知的障害児における歌唱教材によるリズム同期の分析

齋藤 一雄

上越教育大学

Analysis of the Rhythmic Synchronization to a Singing Subject  
by Special Support Class Children

Kazuo SAITO

Joetsu University of Education

abstract

In a music class in an elementary school, handicapped children synchronized a rhythmic pattern to singing subjects by clapping. I analyzed their rhythmic synchronization to determine the kind of rhythmic pattern.

Seven children (from 1st to 5th grade) of a special support class at an elementary school participated in this study. Children could begin beating time with their hands to the tune "Te to Te to Te to". For "Nigitte Hiraite", the sifting rhythmic pattern caused participants to desynchronize. For the tune "Kotori no Uta", participants timely hit their palm with their fingertips according to the rhythmic pattern of the note of birds. For "Ashibumi Tan Tan", the rate at which they could synchronize the rhythm by marching in place was low. An analysis of individual rhythmic synchronization showed that two of the seven children were not accurate with their rhythmic synchronization, another two had their own rhythmic synchronization, while another three children were accurate in their rhythmic synchronization. The course of the rhythmic synchronization showed that there were two types; one was where they omitted the eighth note from the rhythmic pattern, and the other was where they had delicate clapping. Further, the Children recognized their errors and made corrections to synchronize with the rhythmic pattern.

## I はじめに

2・3歳から6歳の発達段階にある健常幼児も知的障害児も、音楽と運動が密接に関係するリズム運動を好んで行っている。そのなかで、音楽に運動を合わせる同期活動については、3歳児になると等間隔の音に同期でき、5歳児で確実になり、6歳児ではいくつかのリズムパターンに同期できるようになるといわれている<sup>1)</sup>。この同期活動は、音楽的な意味だけではなく、外界の音楽に合わせてたり、他の人と合わせたり、自己の精神や運動のコントロールとともに、社会性の基礎を培うという意味をもつ<sup>2)</sup>。

知的障害児教育においても、リズムに同期する活動が取り上げられているが、その教育的意義や発達段階に応じた適切な教材選択や個々の反応の仕方について十分に分析されていない現状がみられる。

養護学校小学部児童を対象とした実践においては、単純にくり返し提示されたリズムパターンに同期するよりも、歌唱教材のなかでリズムパターンを提示して同期するほうが同期しやすいという報告がある<sup>3)</sup>。また、小学校特別支援学級における音楽の授業で、歌唱教材の擬音の部分に同期する活動は、リズムパターンやフレーズを理解し、同期する部分にとらえやすいという点で有効であり、児童が十分になじんでいる歌唱教材を取り上げた場合は、同期しやすいという報告がある<sup>34)</sup>。

しかし、歌唱教材における擬音やリズムパターンのすべてが、児童それぞれの同期活動の実態に合っているとは限らない。また、リズムパターンの種類や児童個々によってどのように同期の状況が異なるのか、同期できなかった場合どのような誤反応をし

ているのか、詳細に分析した研究は少ない。

そこで、小学校特別支援学級の児童を対象に、4つの歌唱教材を授業の中で取り上げ、リズムパターンの種類による同期反応の違い、児童個々による同期の状況や誤反応を分析し、教材選択や指導方法の工夫について検討することにした。

## II 目的

特別支援学級の知的障害児を対象として、歌唱教材におけるリズムパターンの種類による同期反応の違い、児童個々による同期の状況や誤反応を分析し、教材選択や指導方法の工夫について検討する。

## III 方法

### 1 対象

小学校特別支援学級に在籍する1～5年生の7人を対象とした。児童の実態は、担任教師からの聞き取りをもとにまとめた(表1)。この学級の児童は、学校や学級の生活には慣れてきたが、まだまだ、自分で表現する活動において自信をもった表現は少なく、表現方法も3歳台～6歳台の発達段階にある。幅広い実態にあるが、音楽活動には興味や関心があり、それぞれに楽しむことはできている。

### 2 期日・場所・記録

2003年2月～3月、小学校多目的室と音楽室で4回行い、毎回VTRで録画した(表2)(図1)。

### 3 指導者

指導者は、筆者S(計画立案と進行)、音楽担当者F、特別支援学級担任3名の計5名である。

### 4 授業の構成と指導方法の工夫

対象児7名は、1年生2名、2年生2名、3年生1名、5年生2名で、自閉的な傾向のある児童1名、歩行がやや不安定な児童1名も含まれる。慣れないことや人には消極的であるが、他人との簡単な意思疎通がとれ、慣れてくると明るく活発な反応がみられる。このような児童が、楽しみながら参加することができ、積極的な音楽活動をひきだし、身体表現をうながすことができるように授業を構成した。そのなかで、養護学校用音楽科教科書<sup>9)</sup>にある歌唱教材を用いた(表2)。

使用した教材は、季節や行事、生活との関連がある教材を中心に、『バードダンス』(フォークダンス)、

『手と手と手と』(手拍子による拍打ちとリズム打ち)、『にぎってひらいて』(手を握る開く、手拍子によるリズム打ち)、『こどりのうた』(指先手拍子によるリズム打ち)、『あしぶみたんたん』(リズムに合わせた足ぶみ)、即興によるリズム運動(歩・走・パターン歩行など)、『ゆきやまへいこう』(テーマにそったリズム運動)、そして、『かめのえんそく』(鑑賞と歌唱)である。

展開は、児童の興味・関心を大切に、曲想の異なる教材の選択、ダンス、手拍子、足ぶみ、リズム運動、鑑賞と歌唱など種々の活動を少しずつ積み重ねていくようにした。

リズム同期で使用した歌唱教材は、『手と手と手と』『にぎってひらいて』『こどりのうた』『あしぶみたんたん』の4曲である。そして、指導者Sが児童の前で師範し、児童が課題に集中できるように、指導者と音源(電子鍵盤楽器、CDラジカセ)、児童のすわるイスを図1のように配置した。

はじめに、指導者が見本をみせ、歌詞と動作を対応させて課題が理解できるようにした。活動に入る前には、「手を用意して」と両手を開いてみせ、さらに、児童の名前を呼んだり、「手は？」と声をかけたりし、準備の態勢を作った。

曲の提示は、鍵盤楽器によって、前奏を工夫したり、動作しやすいテンポを設定したり、児童の反応の状況に合わせて行った。

課題としたリズムパターンは、四分音による拍打ちと8分音の速い手拍子 $\text{♪ } \updownarrow \updownarrow \updownarrow$ 、3つのリズムパターン $\text{♪ } \updownarrow \updownarrow \updownarrow$ 、 $\text{♪♪♪ } \updownarrow$ 、 $\text{♪♪♪ } \updownarrow$ 、細かい指先での手拍子 $\text{♪♪♪♪ } \updownarrow$ と $\text{♪♪♪♪ } \updownarrow$ (付点のリズムは児童の課題に合わないと考え省略した)、そして、足ぶみで $\text{♪ } \updownarrow \updownarrow \updownarrow$ とした。

### 5 結果の分析

結果については、擬音の部分やリズムパターンに手拍子や足ぶみによって同期する活動をVTRで記録し、筆者と音楽担当によって、児童が行った手拍子や足ぶみを楽譜に起こした。同期したかどうかについては、課題としたリズムパターンと同じであるか、提示したリズムとのずれが16分音以内であるかどうかによって判断した。そして、同期できた割合と誤パターンの種類について分析した。

表1 対象児の実態

児童	学年	性別	学校生活、音楽活動への取り組みの状況
T	1年生	男子	自閉傾向がある。友だちとのかかわりは少ないが、興味のあることには積極的な取り組みと身体表現がみられる。
K	1年生	男子	学校生活の流れはつかみ、自分なりの表現や積極的な活動がみられるが、正確性は十分とはいえない。
M	2年生	女子	積極的に反応するが正確性は十分ではなく、自分中心の表現が多い。友だちとのかかわりも少ない。
Y	3年生	女子	初めてのことや人には消極的である。音楽には正確ではないが、積極的に反応しようとしている。
N	4年生	女子	音楽に合わせた活動を積極的に行い、正確な反応をみせている。
S	5年生	女子	簡単な反応には正確であり、よく聞いているが、まだ自信をもって反応するまでに時間がかかる。
R	5年生	男子	簡単な反応には正確であり、まじめに一生懸命取り組んでいる。しかし、音楽と微妙にずれたりする。

表2 4回の授業の展開と学習活動

	①2月6日(金)	②2月12日(木)	③2月18日(水)	④3月4日(木)
(1) フォークダンス	○	○	○	○
(2) 同期反応				
①『手と手と手と』	○	○	○	○
②『にぎってひらいて』	○	○	○	○
③『ことりのうた』	○	○	○	○
④『あしぶみたんたん』	○	○	○	
(3) リズム運動	○	○	○	○
(4) 鑑賞・歌唱『かめのえんそく』	○	○	○	○

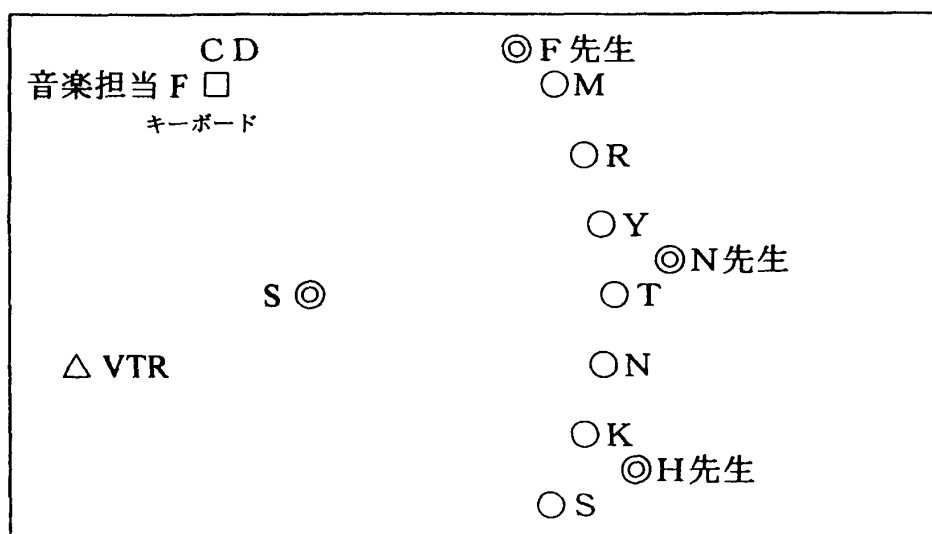


図1 教室における配置図

#### IV 結果

##### 1 『手と手と手と』

『手と手と手と』(二本松はじめ作詞・作曲)は、4/4拍子20小節の曲で、思わず手拍子したくなるような曲で、中間の9～12小節の4小節においては、「手と」(♪♪♪♪)のパターンが4回くり返される特徴的なフレーズとなっている。季節は冬であったので、前半の8小節は「冬だ冬だ冬だスキーへいこう」(2回くり返し)に合わせて手拍子による拍打ちを行い、中間4小節は「手と」のパターン、後半6小節は「手と手と手と手と……なかまがいっぱい」と拍打ちを行った。小節ごとにリズムパターンに正しく同期した場合を1として、全小節数に対する同期数の割合を算出した(図2)。

前半と後半の拍打ちの結果をみると、Mを除いてほぼ同様な割合で同期できていた。Mは、積極的に手拍子しているが、前半の部分では課題に集中できずに取り組まないことや1拍打って1拍休みのパターンになることもあった。しかし、先生が近づいたり、肩に手を触れたりすると同期ができた。後半の部分は、課題にそって手拍子ができていた。

四分音の拍打ちと♪♪♪♪の違いをみると、KMYの3人が、四分音の拍打ちの部分では80%前後同期できていたのに、♪♪♪♪については20%以下となってしまった。

Kは八分音を省略し、四分音で打っていたが、④3月4日になって、初めて八分音2回を打つことができるようになった。Mは四分音になったり、細かく打ったり、遅れたりしたが、20%同期できた。Yは拍打ちでは90%以上同期できたが、①2月6日と③2月18日はほとんど休まずに八分音で細かく打ち続け、②2月12日と④3月4日には休みの部分で休むことができるようになったが、正確に八分音を2回打って合わせることはできなかった。

この3人とは逆に、Rは♪♪♪♪が75%同期できたが、四分音での拍打ちの部分では36%であった。最初はやや遅めであったり、微妙にずれてきたり、遅くなったり、また、細かく手拍子することもみられ、同期できない状況がみられた。

Tは四分音の拍打ちが65～70%、♪♪♪♪が59%、NSは四分音の拍打が87～98%で、♪♪♪♪が81～84%同期でき、大きな差はみられなかった。しかし、Tは四分音の拍打ちにおいては、手を組んでしまったり取り組まないことが9小節ほどみられた。また、♪♪♪♪では数多く手拍子してしまうことが12回みられた。

##### 2 『にぎってひらいて』

『にぎってひらいて』(安田浩作詞・作曲)は、2/4拍子14小節の曲で、歌詞に合わせて手を握って開き、「タンタンタン」(♪♪♪♪)「タタタタタン」

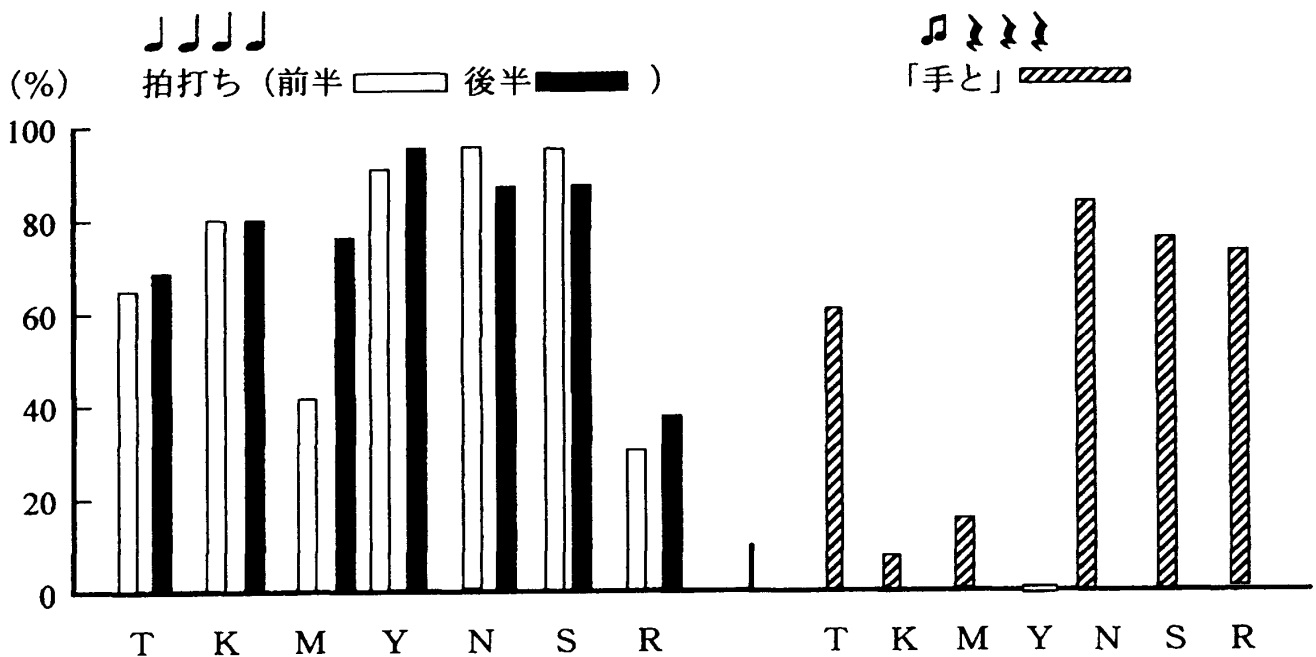


図2 『手と手と手と』のリズムパターンへ同期できた割合

(♪♪♪♪♪)「ターンタンタン」(♪♪♪♪♪-)  
 などのリズムパターンに合わせて手拍子することが  
 でき、そして、やさしさに富んだ曲である。しかし、  
 児童にとっては初めて経験する曲であった。

3つのリズムパターンについて、同期できた割合  
 を図3に示した。全体として♪♪♪♪♪のリズムパ  
 ターンに対する同期の割合が高く、♪♪♪♪♪のリズ  
 ムパターンに対する同期の割合は低く、♪♪♪♪♪-  
 のリズムパターンについてはNSが100%、Tが  
 50%、Yが25%同期でき、KMRは同期できな  
 かった。

Mは両手で行う握って開く動作がうまくできずに、  
 ♪♪♪♪♪のリズムにまで食い込んでしまい、Yは4  
 拍目の休みも打ってしまった。♪♪♪♪♪のリズムパ  
 ターンでは、Kが八分音を省略して四分音で手拍子  
 し、Yは四分音のみの手拍子と♪♪♪♪♪の手拍子が  
 約半々ずつみられ、TMNSRの5人においては、  
 ともに♪♪♪♪♪、♪♪♪♪♪の手拍子が多くみられた。  
 ♪♪♪♪♪-のリズムパターンに対しては、始めの  
 ♪の部分で四分音を2拍手拍子することが多くみら  
 れ、休符の部分でも四分音を打ってしまうことも多  
 かった。

3 『ことりのうた』

『ことりのうた』(与田準一作詞、芥川也寸志作  
 曲)は、4/4拍子、歌の部分が7小節であるが、かわ  
 いらしくまとまった曲である。八分音符や付点の

入ったリズムからなる「ピピピピピ チチチチピ  
 チクリピ」の鳴き声を模した歌詞を含んでいる。そ  
 して、児童にとってはよく知っていて、歌うことが  
 できる曲である。そこで、2回ずつくり返し1セット  
 とした。八分音符の部分は、手のひらに細かく指先  
 打ちして合わせる活動とした。

そして、「ピピピピピ」(♪♪♪♪♪)(♪♪♪♪♪)  
 (♪♪♪♪♪)、「チチチチチ」  
 (♪♪♪♪♪)、「ピチクリピ」(付点のリズムだが省  
 略して♪♪♪♪♪とした)というリズムパターンに  
 同期した場合を1として、全小節数に対する同期数  
 の割合を算出した(図4)。

「ピピピピピ」と「チチチチチ」は♪♪♪♪♪の  
 リズムパターンであるが、両者を比較すると、全員、  
 後半の「チチチチチ」に同期できた割合が高くなり、  
 TNSは100%に達した。また、Kは初め四分音で  
 手拍子することが多かったが、②2月12日に八分音  
 での手拍子を試み、③2月18日の後半でリズムパ  
 ターンに同期できるようになった。Yは、数多く八  
 分音で手拍子しながら、正確ではないがリズムパ  
 ターンに手拍子するようになり、「ピピピピピ」で  
 1回、「チチチチチ」で3回同期できた。Mは細かく  
 手拍子し続けることが多く、止まらなくなることも  
 あったが、3日目の2月18日からはリズムパター  
 ンに合わせて止めることができるようになった。

「ピチクリピ」は、四分音で手拍子するようにし  
 たが(♪♪♪♪♪)、Sは八分音で手拍子することが

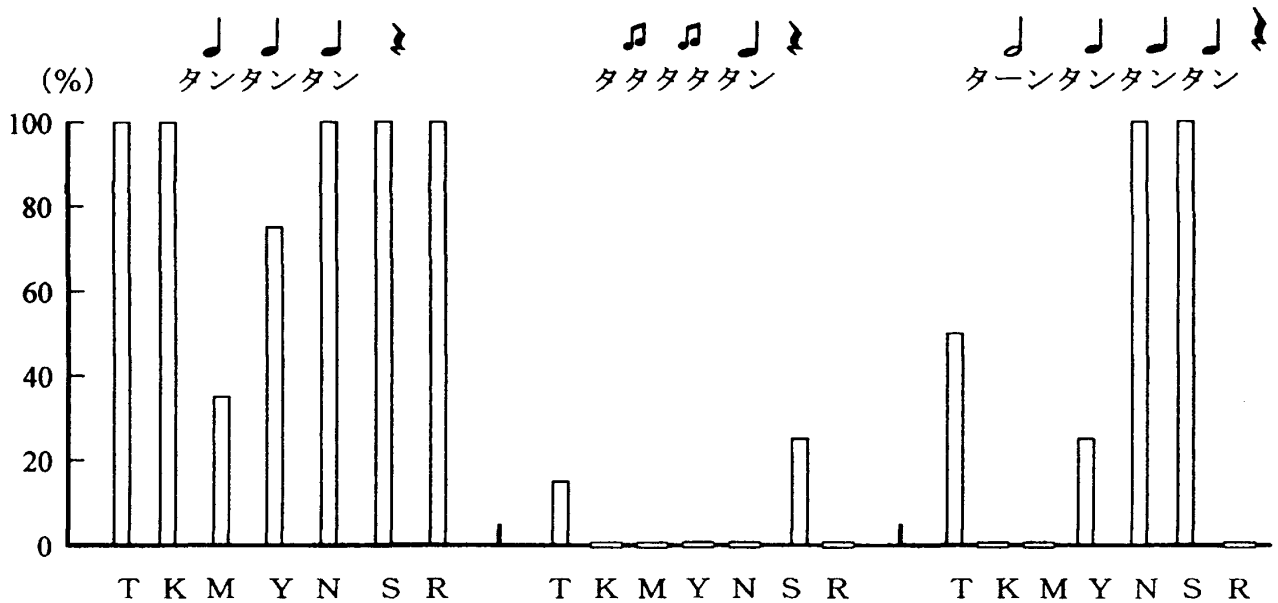


図3 『にぎってひらいて』のリズムパターンへ同期できた割合

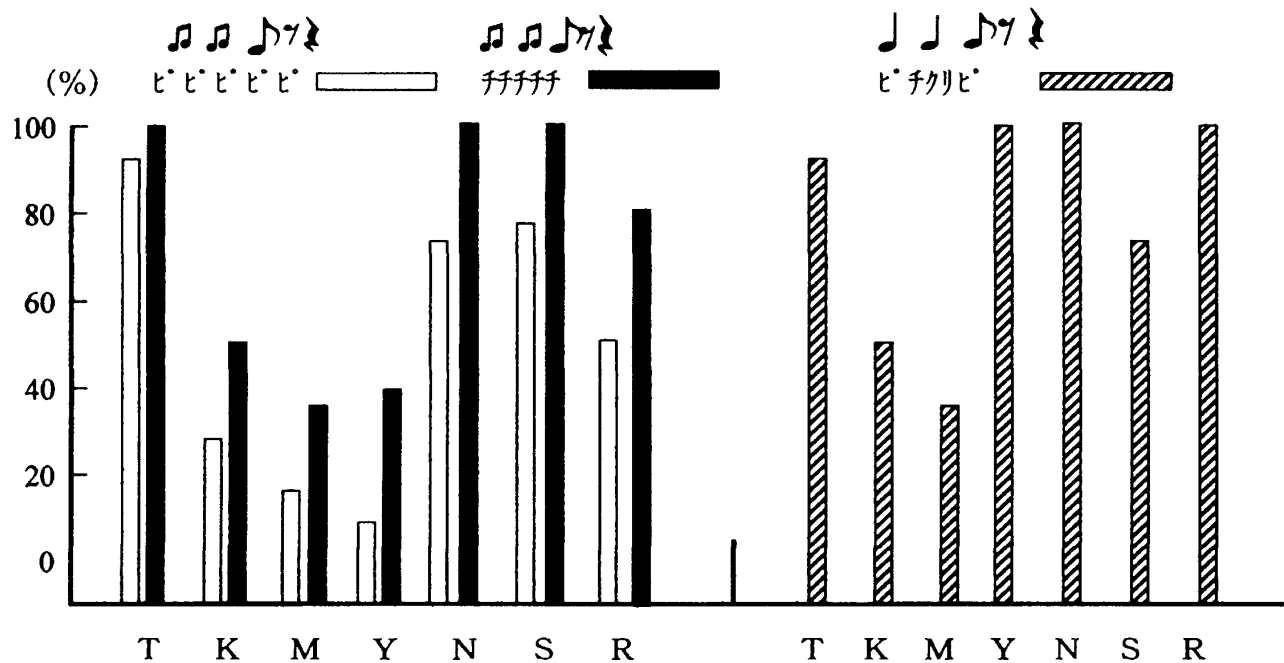


図4 『ことりのうた』のリズムパターンへ同期できた割合

あり、四分音で同期できた割合は75%であった。Kは2音目を省略することがあり、Mは細かく手拍子し続けることがみられた。TYNRの4人は、ほぼ100%同期できた。

#### 4 『あしぶみたんたん』

『あしぶみたんたん』(則武昭彦作詞・作曲)は簡潔な曲で、「あしぶみあしぶみタンタンタン あしぶみあしぶみタンタンタン」という歌詞で、2/4拍子8小節の長さ、曲全体の構成もわかりやすいものである。そのために、2回くり返して1セットとした。そして、「タンタンタン」(♪♪♪♪)のリズムパターンに、椅子にすわりながら足ぶみして合わせる活動を行った(1セットの全試行数は4回)。児童にとっては、初めての曲であった。

結果については、♪♪♪♪のリズムパターンに同期した場合を1とし、全小節数に対する同期数の割合を算出した(図5)。

椅子にすわって足ぶみする動作は、手拍子や打楽器を演奏する動作に比べて大きく、筋力も必要とする。そして、♪♪♪♪のリズムパターンに合わせて片足ずつあげておろすことを3回くり返すと、MYは4拍目にあげた足を止められずにおろしてしまい、4回足ぶみしてしまうことが多くみられた。また、5回足ぶみしたり、「あしぶみあしぶみ」の歌詞の部

から足ぶみを始めてしまうことも、特にMに多くみられた。

TKも、3回で止められずに4回目も足ぶみしてしまうことがみられたが、3回で止めることができるようになった。NSRは、4回目を足ぶみしたり、半拍速く足ぶみしたり、半拍遅れたりしたが、70~90%同期できた。

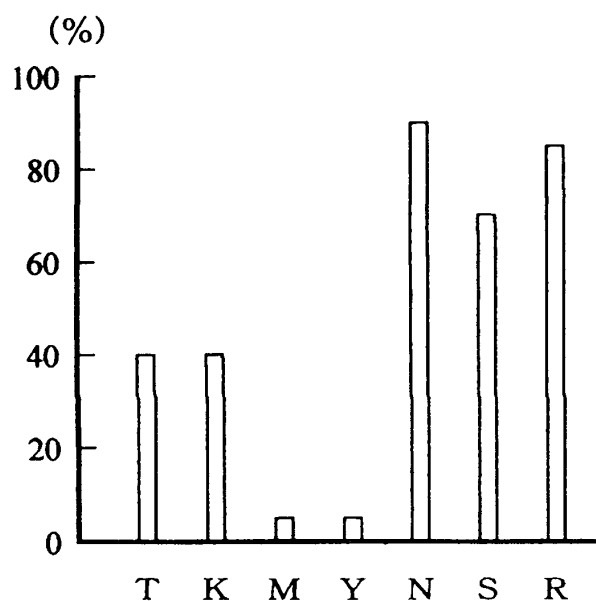


図5 『あしぶみたんたん』の♪♪♪♪へ同期できた割合

## V 考察

### 1 児童の実態の違いによるリズム同期の状況

対象児は、特別支援学級在籍の1・2・3・5年生の7名で、リズム同期の活動には興味や関心があり、それぞれに楽しむことができた。しかし、個々それぞれ異なる特性をもっており、リズム同期においても、様々な違いや共通点がみられた。そこで、楽しんではいるが正確性が十分ではないKY、自閉的で友だちとのかわりの少ないTM、簡単な課題に正確に対応できるNSRの3つのグループに分けて、リズム同期の状況を考察することにした。

#### (1) 楽しんではいるが正確性が十分ではないKY

Kは手拍子が大好きで、指導者Sの手拍子を見て、積極的に『手と手と手と』に合わせて拍打ちを行うことができた。また、『にぎってひらいて』におけるの♪♪♪♩には100%同期でき、速度がゆっくりで繰り返しのあるリズムについては対応できるようになることがわかった。しかし、♪♩♩♩、♪♪♪♪♩のように突然の変化や八分音と休符の組み合わせ、『にぎってひらいて』のように1回ずつリズムパターンが変化していくものには同期できなかった。

『こどりのうた』の♪♪♪♩♩♩については、四分音で反応することが多かったが、歌をよく知っており、「ピピピピピ」の部分で指先打ちすることがわかり、正確に同期できるようになった。

Kは1年生であること、表現においても正確性が十分とはいえない実態があり、四分音が連続するパターンへの反応は正確になったが、八分音を含む音の長さが異なる組み合わせには、正確な対応ができない段階であることが示唆された。

Yも、『手と手と手と』の拍打ちでは積極的に手拍子し、90%以上できていたが、♪♩♩♩の部分では八分音を打ち続け、休むことができなかった。逆に、『にぎってひらいて』の♪♪♪♪♩のリズムパターンでは、八分音を省略する♪♪♪♩と♪♪♪♪♪の誤パターンが約半々みられた。『こどりのうた』では、数多く八分音で手拍子しながら、リズムパターンに同期するようになり、♪♪♪♩♩♩は100%同期できた。

Yは3年生で、思わず手拍子してしまいそうな『手と手と手と』やよく知っている『こどりのうた』には、音楽に同調する傾向があり、リズムの変化や

八分音を含むリズムパターンへの同期について、四分音にまとめて反応する段階にあると考えられる。

これらの状況は、四分音の拍打ちができる段階ではあるが、休符や八分音、音の長さの違いに気づきながら、運動が制御できない段階ではないかと推察する。

#### (2) 自閉的で友だちとのかわりの少ないTM

Tは、『手と手と手と』の拍打ちに最初から同期できたが、取り組まないこともあった。Mも①2月6日と②2月12日には課題に集中できず、取り組まないことがあったが、指導者が近づいたり、肩に手を触れたりする支援によって同期がみられるようになった。Mは、積極的に反応する部分もあるが、自分中心の表現が多く、正確性も少なく、ことばによって動きをコントロールすることがやや困難で、教員の支援が必要であった。

また、Tは『にぎってひらいて』の♪♪♪♪♩のリズムパターンでは♪♪♪♩の誤パターンが多かったが、最後になって1回正確に同期することができた。

このことは、最初に現れる♪♪♪♩が繰り返されるという予期が働いたが、八分音が鳴ったために、2拍目で八分音に反応し、♪♪♪♩の誤パターンになったのではないかと考える。また、自閉傾向の知的障害児は、手指の運動機能面では器用さをみせる傾向があり、八分音の手拍子も十分可能で、最後に曲の構成をつかみ、正確に反応することができたと考える。

同様に、♪♪♪♪♩-のリズムパターンに対しても、始めは♪の部分で四分音を2回手拍子してしまうことが多かったが、自分で修正して2分音に合わせることができ、パターン全体に同期できるようになった。Tは、知らない曲でもしだいに聴いて理解することができ、自分で誤りに気づいて修正していくことが可能な段階にあるといえる。

#### (3) 簡単な課題に正確に対応できるNSR

NSの2人は、『手と手と手と』『こどりのうた』におけるリズムパターン全体については80%以上でき、『あしぶみたんたん』でも70%以上同期できたが、『にぎってひらいて』の♪♪♪♪♩のリズムパターンでSが0%、Nが25%という同期の状況であった。簡単なリズムに対しては同期は可能だが、八分音と四分音、四分休符の組み合わせによるリズム

ムパターンやリズムパターンが変化していくことに弱さがあるといえる。

NSは3年生と5年生で、身体機能も成長し、音楽もよく聴いて反応できるようになっているが、Sについては実態表にもあるように、聞き取りと自分の反応に自信がないことが影響したのではないかと考える。

Rは、『手と手と手と』の♪♪♪♪に対しては75%同期でき、逆に、四分音での拍打ちの部分では36%同期できただけで、微妙にずれることが特徴的であった。また、『にぎってひらいて』では正確な同期がみられず、『こどりのうた』の最初の「ピピピピ」も50%同期できた。

Rも簡単な課題には正確であるが、連続した課題に対しては微妙なずれが生じ、準備の姿勢や先を見通すこと、そして、自分の手拍子の反応が提示された音楽やリズムパターンにあっているのかどうかの結果のフィードバックがうまくできていないことが影響したと考える。

## 2 リズムパターンの違いによる同期の状況

4曲の歌唱教材に含まれたリズムパターンに対して、手拍子や足ぶみで同期する課題を設定した。これらのリズムパターンの中で、最も同期できた割合が高かったものは、『にぎってひらいて』の♪♪♪♪のパターンであった。『にぎってひらいて』は、2/4拍子14小節、短い曲で、動作もわかりやすく、テンポも88 bpm前後でゆっくりしている。また、「にぎってひらいてタンタンタン」と歌詞と動作が一致しており、両手を握って開く動作の後に手拍子のリズムパターンが一回だけ出てくるので、KYにとってもわかりやすく、両手を開いて準備してから手拍子することも容易であったといえる。

『こどりのうた』の3つ目のリズムパターン「ピチクリピ」(♪♪♪♪)は♪♪♪♪に近いパターンに変えたので、同期できた割合が高かった。しかし、『にぎってひらいて』と異なる点は、3つのリズムパターンが連続して現れることにある。そのために、KSの同期できた割合が、50%、75%になってしまったのではないかと考える。

『あしぶみたんたん』の♪♪♪♪も同じリズムパターンであるが、反応する部位が手拍子から足ぶみになっている。足ぶみのほうが動作が大きく、慣れ

ていない反応の仕方なので、同期できる割合が小さくなったのではないかと推察している。

一方、『手と手と手と』は、思わず手拍子したくなるような曲想で、児童もピアノの伴奏にのって楽しく手拍子することができ、四分音の拍打ちでは全員が40%以上同期できていた。しかし、6小節も連続すると24拍打ち続けることになり、その打ち続けることがむずかしかった児童もいた。

『手と手と手と』では、四分音を連続して手拍子したあとに、突然「手と」(♪♪♪♪)のパターンが4回続く。TNSRははじめ対応できなかったが、回を重ねながら対応できるようになっていった。KMYは対応できず、同期できなかった。

『こどりのうた』の♪♪♪♪♪のリズムパターンに対しても同様の結果がみられ、KMYの対応はむずかしかった。TNSRは同じ♪♪♪♪♪のリズムパターンでも、「ピピピピピ」よりも後の「チチチチチ」のほうがよい結果であった。2回目になるとリズムパターンの理解が進み、結果に対して修正することができたのではないかと考える。また、『こどりのうた』では、左の手のひらを右手の指先で打つようにし、動作を小さくすることによって、八分音に対応しやすくなったと考える。

八分音のように短い音に対するだけではなく、『にぎってひらいて』の最後に出てくる♪♪♪♪♪-のように、長さの異なる音が組み合わせられると同期することがむずしくなることが示唆された。

## 3 リズム同期における誤パターンの分析と反応のタイプ

『手と手と手と』の前半と後半の四分音の拍打ちにおいて、Mが♪♪♪♪のパターンで手拍子していたが、4/4拍子の強拍だけ手拍子し、弱拍の部分を休んだと考えることができる。同様に、♪♪♪♪の部分では、Kが四分音で手拍子し、Yは八分音で細かく打ち続け、Mは四分音になったり、細かく打ったり、少し遅れたり、TNSも数多く手拍子してしまうことがみられた。正確な同期には至らないが、児童なりに音楽の要素をとらえながら同期しようとしていることが観察された。

『こどりのうた』の♪♪♪♪♪でも、Kは四分音で手拍子しながら、Yは数多く八分音で手拍子しながら、Mは細かく打ち続けながら同期することがで



きるようになった。♪♪♪♪♩においてSは八分音で手拍子することがあり、♪♪♪♪♩のリズムに影響されたことが考えられる。Kは2音目を省略することがあり、「ピチクリ」の♪♪♪と「ピ」の♪♪♩を♪♪♪ととらえたと推察することもできる。

『にぎってひらいて』の♪♪♪♪♩においても、KYが♪♪♪♪♩と♪♪♪♪♩の手拍子を半分ずつ行い、TMNSRは♪♪♪♪♩、♪♪♪♪♩の手拍子を多くみせた。これらは、最初の♪♪♪♪♩のリズムをひきずりながら、八分音を意識してはいるが切り替えがうまくできず、同期できなかつたと考えられる。

しかし、『あしぶみたんたん』においては、TKMYが4回足ぶみしてしまうこと、NSRが4拍目も足をあげておろしてしまうことがみられたが、半拍速くしたり遅くしたりしながら、自分で調整して同期することができるようになった。

これらを段階ごとに整理してみると、KMの強拍で手拍子し弱拍で休む、連続する八分音を四分音に替えて同期する段階、『あしぶみたんたん』でみられた4拍目の休みに反応できるようにしていく段階、TYRNSの八分音を連続して数多く手拍子して調整していく段階、そして、正確なリズムパターンに合わせて同期していく段階と4段階が考えられる。

さらに、児童個々の同期の状況から、K→R→S→Nのように、八分音を省略しながら手拍子し、しだいに正確に合わせていくタイプと、M→Y→Tのように細かく数多く手拍子しながら合わせていくタイプと2つの発達過程のタイプがあることがとらえられる。

また、指先で手のひらを打つ、手のひらを合わせて手拍子する、足踏みをするというように、細かい動作から大きな動作になるにつれて、正確な同期ができにくくなったが、身体の様々な部位で反応することによって、リズムに合わせるためにはどうしたらよいか工夫することがみられた。

さらに、同じパターンであれば、2回目のほうが誤パターンが少なくなり、同様に、知っている曲のほうが初めての曲よりも、自分の間違いに気づいて修正しやすい傾向がみられた。

また、『手と手と手と』の♪♪♪♪♩のように、手拍子の数が少ないほうが、パターンを理解しやすく、反応しやすかった。また、『にぎってひらいて』の

「ターンタンタンタン」のように、異なる長さの音の組み合わせより、同じ長さの音の組み合わせによるリズムパターンのほうが、合わせやすいことがわかった。

このように、いろいろな動作やテンポ、曲想をもった曲にくり返し取り組むことによって、児童は自ら間違いに気づき、同期できるように工夫していることが示唆された。

#### 4 教材の選択や指導方法の工夫

小学校特別支援学級の児童を対象に、養護学校用小学部音楽科教科書『おんがく☆』『おんがく☆☆』『おんがく☆☆☆』<sup>9)</sup>の歌唱教材から、手拍子による拍打ちとともに気持ちを高揚させる曲、歌詞と動作が一对一の対応になるような曲を探し、『手と手と手と』(『おんがく☆☆☆』)、『にぎってひらいて』(『おんがく☆』)、『こどりのうた』(『おんがく☆』)、『あしぶみたんたん』(『おんがく☆』)の4曲を使用した。

手拍子による拍打ちとともに気持ちを高揚させる曲として『手と手と手と』(『おんがく☆☆☆』)を使用した。ほとんど説明を要しないで全員が手拍子を始めることができた。その点では、ねらいどおりの教材であったといえる。しかし、正確に拍に合わせて続けることは簡単ではなく、同じ長さの音を連続して打ち続けるためには、気持ちと運動のコントロールが必要であることが示唆された。

逆に、『にぎってひらいて』(『おんがく☆』)のように、歌詞の内容に合わせて動作をする曲では、♪♪♪♪♩、♪♪♪♪♩、♪♪♪♪♩とリズムパターンが変化する点ではむしろかきさがみられたが、よく聴いて合わせようとする意欲が読み取れた。児童にとっては初めての曲であったが、歌詞と動作がすべて一致していたので、集中して取り組むことができた。

『こどりのうた』(『おんがく☆』)は児童もよく知っている曲で、前半部分では一緒に歌ったりする様子もみられ、後半部分で鳴き声のリズムパターンに合わせて、指先をくちばしに見立てて、手の平を打つ動作もイメージしやすく、楽しく取り組むことができた。また、前半の歌の部分で手拍子を開始する準備をすることができる構成もよかった。「ピピピピ」「チチチチチ」と同じパターンが2回くり返

される部分もあり、同期できた割合が高くなったことにつながっていた。

『あしぶみたんたん』『おんがく☆』は、反応の部位が手拍子から足ぶみに変わったので、リズム同期できた割合は手拍子よりも足ぶみは低かったが、リズム活動全体に変化をもたせることができた。

以上のことから、歌唱教材をリズム同期の教材として選択し活用するには、『こどりのうた』のように手拍子の準備を促すことができる構成や、『手と手と手と』のように反応を引き出しやすい曲ではあるが、集中を持続するための工夫が必要でことが示唆された。そして、『にぎってひらいて』や『こどりのうた』のように、児童が親しんでいる曲や擬音の入った曲、歌詞と動作が一致した曲は、反応しやすいことがわかった。ただし、『にぎってひらいて』や『手と手と手と』のように、擬音などのリズムパターンが複雑であったり、それぞれパターンが異なったりすると同期しにくくなるので、児童の実態に合わせてテンポを設定したり、編曲したりすることなどの点を考慮する必要がある。

## 引用文献及び注

- 1) 古市久子 (1971) 「Rhythm 反応における発達の研究の検討と実験」『音楽学』日本音楽学会第 17 巻, pp. 94-106
- 2) 梅本堯夫 (1987) 『認知科学選書 6 認知とパフォーマンス』東京大学出版会, p. 73
- 3) 齋藤一雄 (2004) 「養護学校用音楽科教科書の教材による授業」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学第 23 巻第 2 号, pp. 537-547
- 4) 齋藤一雄 (2004) 「知的障害児のリズム反応における歌唱教材の活用」『上越教育大学研究紀要』上越教育大学第 24 巻第 1 号, pp. 77-87
- 5) 文部科学省 (2002) 『おんがく☆』『おんがく☆☆』『おんがく☆☆☆』『音楽☆☆☆☆』東京書籍
- 6) 本文中の曲名は、文部科学省著作養護学校用教科書をもとにした。